



表参道入り口に誕生した「Cafe 榎乃杜」

# かしはら



かしはら  
第182号

令和5年

紀元2683年

- 御挨拶
- 神縁に導かれて 平居宏朗
- 日本を守る 高橋迪
- 主な祭典・行事の御報告
- 企画展「天皇陵巡りの近世・近代」開催の経緯と見どころ 長谷川怜
- 榎原たより
- 第二回「春の出会い 神武さん」のお知らせ

## 御挨拶

暖かな春を迎え、境内の桜は今年もまた新しい花を開かせようとしております。令和元年年末に発生した新型コロナウイルス感染症は、感染拡大の波が繰り返され未だに私達の生活に影響を与え続けております。榎原神宮でも感染拡大当初は皆様に祭典への御参列を御遠慮していただくことや、様々な行事の中止を余儀なくされました。しかし、感染症対策を施しながらではあります。元の日常が徐々に取り戻されつつあります。

昨年は、全てではありませんが祭典で多くの皆様をお招きして齋行することができましたこと、ここに御礼申し上げます。また、祭典以外でも徐々に元の風景を取り戻しつつあり、七月三十一日から八月四日迄は三年振りに「榎原神宮 林間学園」が開催されました。例年とは異なり、午前中のみと大変短い時間ではありましたが、参加された児童の皆さんの生き生きとした笑顔が境内に広がっております。林間学園では講師の先生方をはじめ、大阪芸術大学様や奈良県文化財保存事務所様に御協力いただき開催することができました。特に大阪芸術大学様には総合学習で境内に生育している竹を用いた楽器づくりをお願いし、また奈良県文化財保存事務所様には歴史教室参加の児童に現在、解体修理工事中の文華殿の見学

説明をしていただきました。どちらも榎原神宮の林間学園でしか体験できない素晴らしい授業をしていただくことができ、参加児童の皆さんの貴重な夏休みの思い出のページとなったことかと存じます。

そして、『かしはら』第一八一号でもお伝えしました通り、昨年は四月二日・三日の「御鎮座記念祭」・「神武天皇祭」に併せて奉祝行事である「春の出会い 神武さん」を、六月九日には「皇后献上佐章祭」をはじめ齋行させていただきました。更に七月には御参拝の皆様が御休憩できるように境内に喫茶スペースである「Cafe 榎乃杜」が誕生し、十月十二日には裏千家の坐忘齋家元千宗室様奉仕の元で三十二年振りとなる「献茶祭」を齋行するなど様々なことに挑戦してまいりました。本年も四月二日・三日には奉祝行事「春の出会い 神武さん」を開催いたしますので、御参拝・御参列の折りには是非皆様でお楽しみいただければ幸いです。

移り変わりも激しく、まだまだ先の見えない世の中ではありますが、その中でも新しくも変わらない榎原神宮であり続けられたいと存じます。皆様の日常が明るく穏やかであることを心より祈念申し上げます。

榎原神宮宮司 久保田昌孝

平居 宏朗

『払暁雄誥くあかつきの歌』の作詞を依頼されたのは、二〇二〇年十月十日のことでした。

同日、伊勢神宮にて催される「陸上自衛隊中部方面音楽隊 奉納コンサート」にて、私が作詞した歌曲『天の岩戸』を音楽隊所属のソプラノ歌手である鶴真衣さんが歌ってくたさるというところで、神宮に伺った所、当時、同音楽隊の隊長であった柴田昌宜さんをご紹介頂いたことが契機となりました。その際、柴田隊長より、神武天皇を題材にした作品の構想があり、作曲家は決まったが、作詞家はまだ決まっていないというお話をお聞きしました。過去に神武東征を題材にした作品として、作曲が信時潔、作詞に北原白秋の傑作『海道東征』があることも知り、まさか自分が神武東征の歌詞を書くとは思ってもよらなかったのですが、日本神話や古事記が好きであったことから、初対面であるにも関わらず、柴田隊長とは神武東征に関しての話題で盛り上がることとなりました。以前より、神

武東征に関する書物やエピソードを収集していた私ですが、中でも、『初國』と題された神武東征を詠んだ長歌に特に感銘を受けていたことから、その和歌を柴田隊長に向かつて、誦んじた所、大いに感じいつて下さり、作詞依頼の運びとなりました。

しかしながら、過去には北原白秋、そして、私が最も尊敬し、敬愛する『初國』を詠んだ歌人、執行草舟氏の両作品を前に、依頼された喜びと共に途方に暮れたのも事実でした。普段は一会社員として働く私の作詞家としての実績は皆無に等しく、二十代の時分、執行草舟氏の詠んだ和歌に衝撃を受け、爾来、自分でも和歌をたしなむものの、誰かに師事したこともなく、全て我流のものでした。何ら実績のない私に作詞を依頼してくださった柴田隊長の期待に応えるべく、出来ることといえば、今一度、神武東征を扱った書物、文献にあたることと自分が最も衝撃を受けた和歌である『初國』をひたすら毎日、朗誦し、神武東征の時代に思いを馳せることでした。

そして、作詞依頼より一年が過ぎ、柴田隊長との何度かのやり取りを経て、完成したの

が『払暁雄誥くあかつきの歌』でした。「払暁雄誥」とは夜明けを告げる雄叫びの意であり、日本の夜明けともいえる神武東征に参集した者たちの心意気を詩に込めました。

神武天皇の御心を歌詞とすることは畏れ多くもあり、断念しましたが、東征に馳せ参じた我々祖先の思いを今に伝えることはできないのではないかと、従軍し、戦に臨む兵の思いに自身を重ね、書き上げた次第です。

また、伊勢の地での出会いが、この歌詞を生むきっかけとなったこともあり、天照大御神の存在も「天地にあまねく満つてり皇神の大御心」と詩中に表現させて頂きました。

現代において、伝説や神話が史実であったかどうか、問われることが多々ありますが、古代より今に至るまで語り継がれ、伝承されているということが何よりも重要なことであると私は考えております。果たして必要性がなく、意味のない物語や逸話が数百年、数千年を経て人々の間に残るものでしょうか。何かしらの意義や意味があるからこそ、永い時の淘汰を経てもなお、多く人の心をうつ普遍的価値を神話や伝説と呼ばれるものは有しているに違いありません。

したがって、神話や伝説上の人物達はその逸話が現存している時点で、現代においても

なお、読む人、知る人の中でその存在は生きています。よって、自分は史実であったか、事実であったかどうか、それよりも、その伝承を知り、その精神に触れたものがどの様に生きてゆくのが重要であり、その思いを現代においても大切に守ってゆこうという意思を込め、『払暁雄話』あかつきの歌』を記しました。そして、その思いは、鈴木英雄先生の作曲、鶴真衣さんの歌、柴田隊長の指揮、自衛隊音楽隊の皆様の演奏により、具現化して頂くことが出来ました。我ら祖霊の雄叫びが歌となって甦り、その響きは私の想像する以上のものでした。

なお、作詞構想中に、度々、足を運んだ最寄りの神社が、渋谷区代々木に鎮座する明治神宮でした。明治神宮の御祭神である明治天皇が、神武天皇を祭られる橿原神宮の創建に篤く関わられていたことを、先日、橿原神宮の久保田宮司より伺い、改めて神縁を感じずにはいられません。伊勢の地より導かれ、明治帝のもとで温め、産まれた歌詞のいわれをこうして橿原神宮の社報に記すこと

の不思議さと有難さを現在、かみ締めております。

国内、国外共に、混迷を極める昨今ですが、『払暁雄話』あかつきの歌』の歌詞の最後に記した「まほろばの國」とは神武天皇、そして、天照大御神が慈しんだ我が国の理想の姿です。また、詩中に記した「闇夜に棲まう醜ども」とは東征を妨げる敵の姿だけでなく、我々の心に巢食う暗部と云ってよいかもしれせん。神武東征の気概を呼び起こし、日に向かい、まほろばへの道を歩んでゆくという現代に生きる我々を歌った詩でもあります。

歌に込めた想いは尽きませんが、こうして橿原神宮の社報に寄稿できると素晴らしい曲と演奏に仕上げた関係者の皆様、そして、多大なるインスピレーションを授けて下さった『初國』の詠者、執行草舟氏への謝意と共に本稿の筆を置かせて頂きます。

#### もののふの

たけきところをなぐさむる

うたはあかつき

ひびきてらせよ

#### 「払暁雄話』あかつきの歌」

作詞 平居宏朗

暁 あかつきはら 払う雄叫びよ

闇夜に棲まう醜どもを

撃ちてしまぬもののふの

猛る命の轟かせ

日嗣の御世を打ち立てん

天地にあまねく満てり 皇神の

大御心を魂に受け

大和の國を慈しむ

神日本磐余彦尊立ち

継ぎし日向の弥栄を

千代に八千代に言祝ぎて

永遠に伝えん 暁の

歌よ照らせよまほろばの國

#### プロフィール 平居 宏朗(ひらい ひろあき)

昭和五十一年埼玉県に生まれる。日本大学芸術学部中退。作詞家。歌人。

詩作を中心に音楽、映像、脚本等の創作活動に携わる。

著述家、歌人である執行草舟氏の和歌に出会い、作歌を始める。

これまで、小池一夫、上田きょうや、松永暢史に師事し、作品作りを行う一方、古事記、万葉集をはじめとする日本の古典文学をこどもたちに指導する素読・音読教育家としても活動。



## ① 今そこにある危機

第二次世界大戦後に平和構築システムとして作成された国際連合憲章が重大な危機を迎えています。

令和四年二月二十四日にロシア軍がウクライナに侵攻しました。国連憲章では他国への軍事侵攻は重大な違反です。国連安全保障理事会によるロシアの軍事侵攻非難決議は、ロシアの拒否権発動で葬られ、国連の安全保障機能が機能しないことが明らかになりました。

我が国で第二次世界大戦後の昭和二十三年に国連憲章を踏まえて発足した海上保安庁は、現在、沖縄県の尖閣諸島海域で無法な中国の警備船に対する領海警備に当たっています。平和な時代に生まれた組織として大きな時代の転換点に立っています。

国連憲章は第二次世界大戦の勝利国である米国、英国、仏国、ソ連、中国の五か国を完全保障理事会の常任理事国としています。成立当時のソ連代表はスターリンでしたが、その後四十五年間の米ソ冷戦時代を経てゴルバチョフの時代にソ連邦が解体されました。ロシア連邦として、現在のプーチン政権とな

り、常任理事国として国連憲章違反を犯しました。

常任理事国の一角を占めた中国代表の蒋介石は昭和二十四年に共産党との内戦に敗れ、台湾に逃れて国民党政府として政権を維持しました。昭和四十六年に国連代表は中華人民共和国に変更されます。習近平主席に代表される中国は、平成二十年以降、南シナ海の、フィリピン、ベトナム海域において国連海洋法条約に違反する形で、珊瑚礁を埋め立て、軍事基地を建設し、軍事力強化を図り、既成事実化しています。尖閣諸島海域でも無法行為を続けています。

日本の隣国であるロシアと中国、北朝鮮は核兵器を保有する軍事国家です。その三か国がこの十年間の間に近隣諸国に対して軍事威嚇を繰り返し国連憲章違反をする状況は、今そこにある危機といえます。

## ② 近代国家の海上保安体制

我が国の近代体制構築は、明治維新に始まります。幕府、藩の体制から明治天皇親政による体制に変化して、欧米諸国の政治・経済・軍事体制に追いつくべく近代化を推進、富国強兵政策をとりました。

当時の世界は、弱肉強食の時代で、明治直前にはアヘン戦争により大国の中国が英国に

敗れ、領土の香港を占領され、更に欧米諸国が中国での権益確保に躍起の時代でした。明治新政府は、明治九年小笠原諸島を日本の領土と確定し、明治十二年琉球王国を沖縄県として日本政府の範囲に収め、明治二十八年には尖閣諸島を沖縄県の土地として編入しています。明治三十五年には米西戦争の結果として米国がフィリピンを自治領にするという時代でした。

近代国家として欧米諸国からの植民地化をさける国防のための海軍力確立は急務でした。外国の海軍力と戦う海軍の建設には莫大な予算が必要でした。

経済力を増強するために日本政府は、貿易による国力の強化を図ります。外国政府も日本との海上貿易で利益を得ようと、日本との間に和親条約を結び、商船のために、安全な港の築造と水路の確保、灯台の建設、関税制度などを求めてきました。

外洋における国家権力、日本の統治力として、帝国海軍は、船舶の海難救助や海上交通安全のための海図の印刷、安全な航路の建設など海上保安活動を行っていました。外洋の漁業紛争の場合には海軍の軍艦が出動して日本漁船を保護する活動も行っていました。

日本海軍が模範としたのは英国海軍でした。米国では、灯台の管理や海難救助、密輸

船の監視業務は沿岸警備隊の仕事として海軍とは区別されていました。

第二次世界大戦後の昭和二十年に帝国海軍は解体され、海上治安の力の空白が生じ、海上は無法地帯となります。国連の占領軍政策により、米沿岸警備隊を模した組織創設が指示され、昭和二十三年に国連憲章に沿った形で海上保安庁が発足、戦後の七十四年間海上保安体制として活動してきました。

### ◎三 海上保安庁と海上自衛隊

昭和二十年以後の世界は国連憲章の枠組みの下で、戦争は慎むという平和の時代に海上保安庁は、創設されました。

米ソ冷戦が始まり、独立直後に国連憲章と日米安全保障条約の枠組みの中で海上自衛隊は創設されます。

世界平和を目指したわずか数年後の昭和二十四年に、中国本土ではソ連の支援を受けた共産党政権が生まれ、国民党政府は台湾に逃れて政権を確立し、直後の昭和二十五年、二十六年と朝鮮戦争が起きます。ソ連、中国の共産党の支援を受けた北朝鮮は南に軍事侵攻し、米、国連の支援を受けた韓国との戦争が起き、休戦します。米ソ冷戦が始まり、日本は米国との協力関係を選択して、日米安全保障条約の枠組みの中で、昭和二十七年軍

隊といわない海上自衛隊の名称で防衛力強化を進めました。

昭和三十年代に、国民の間の反戦意識が強い社会の中で、平和的な国際南極観測へ海上自衛隊の南極観測船支援など地道な活動を続けます。

海上保安庁は、日本経済の成長に伴い、国際貿易の増加、産業強化と共に造船業の発展、海運業の発展、海上交通量の大幅な増大、巨大な海難事故の発生に対応して、海上交通安全法の創設や、海難救助体制の強化、搜索救助条約加入などに取り組みました。

昭和四十年代後半に日中国交回復と同じ頃に中国は、尖閣諸島を自国の領有であるとの主張を始めました。海上保安庁は、以来五十年、中国政府の詭弁や欺瞞による様々な尖閣諸島の領海侵入活動に対抗し、有効支配を維持してきました。

平成の時代には、海上保安庁は東南アジア、中東、アフリカなどの独立新興国に対する技術協力支援、更に世界の海上保安機関の意思疎通を図る国際会議の開催など平和な海の構築に地道な努力を続けました。

一方、海上自衛隊は日米安全保障条約の枠組みの中で、反戦、平和意識の強く残る日本社会で、幸い、我が国に武力侵攻する国はなく、本来任務を実施するための装備の充実と

訓練と米軍との協力強化をすすめました。

尖閣問題、台湾問題については、中国が核心的利益として武力の使用にも言及しています。台湾攻撃の場合は、米国が対応するとの話もあり、中国からの沖縄の米軍基地攻撃があれば、日本本土への武力攻撃となり、海上自衛隊の防衛出動の仕組みとなっています。

自衛隊には、海上自衛隊のほか陸上自衛隊と航空自衛隊があり、それぞれ侵略に対応する戦力の保持と抑止力が役割です。また災害の多い日本では災害支援も大きな役割です。米ソ冷戦時代は北海道方面への兵力の展開が厚かったといわれます。

最近の朝鮮半島、台湾海峡での日本と米国への脅威は、中国の軍事力増強によるものです。日本の大きな課題は、中国による国際社会の平和的枠組みへの挑戦への対応です。

### ◎四 日本を守るために、国防意識の強化

ウクライナへの武力侵攻の教訓の一つに、プーチンや習近平の武力侵攻の原因として、自国が大国であった当時へのノスタルジアと恥辱の復讐という点が読み取れます。第一次大戦後のドイツのヒットラーとの共通点です。

軍事侵攻を受けたウクライナの国民が示したことは、ロシア軍による破壊や暴力活動に対する専守防衛体制の中で、強い国土防衛意

識です。家族を国外に避難させた後、戦うために国境から戦場に戻る国民の姿でした。家族を守るために国を守るといふ国防意識です。

ロシアにはウクライナがNATOやEUに接近することへの危惧があったといわれます。中国には、民主、自由主義の日本や台湾が米国と同調して成功し、日本国民の尖閣防衛意識の強化や台湾人の独立志向への危惧があります。

プーチンがロシア人の人権保護のためにウクライナに侵攻したとの詭弁は、中国の習近平が台湾の民衆を保護するためにと称し、尖閣諸島問題では領土を奪還するなどの詭弁と類似しています。

中国の鄧小平から習近平に至る共産党政権は、尖閣諸島の地下に眠る石油資源の調査結果が目がくらし、百三十五年前から歴史的にも、法律的にも日本の領土であり、日本人の居住実績のある尖閣諸島について、三十年前に中国に属するとの法を制定して詭弁を言い募ります。

日本政府は尖閣諸島に領土問題は無いとの立場です。中国政権は五十年間かけても、海上保安庁により有効支配している尖閣諸島を領土問題化できませんでした。次の中国の打つ手は、何らかの武力衝突を起こし、日本からの武力攻撃があったと詭弁を使い、尖閣に

武力侵攻する口実を捏造し、領土問題であると主張することが考えられます。

中国が尖閣に武力侵攻すると、日本は海上保安庁の法令励行活動から海上自衛隊、陸上自衛隊、航空自衛隊の防衛出動に移行します。習近平はプーチンと同様、武力侵攻を欺瞞と詭弁を使い、南シナ海での成功体験と同じく中国人の利益のため、中国人の権利を取り返すためとの詭弁を使うと予測されます。

台湾への武力侵攻の場合、沖縄米軍基地からの反撃に対抗し、中国による米軍基地攻撃が予測され、それは日本への武力攻撃を意味するので、我が国は、直ちに防衛出動となります。中国の武力侵攻を抑止し、万一の武力侵攻には相手に壊滅的な反撃を行う必要があります。そのためには、日本国民が政府の方針を理解して自衛隊の防衛力、反撃力を支援する必要があります。

現在私の会社では、国民の意識を高めて頂くため、「尖閣問題の現状と展望」を令和三年に出版し、広く国民の皆様にご覧頂く努力を続けています。

「かしはら」読者の方にも是非この本を手にとって、中国詭弁の見破り方、尖閣問題の背景、防衛力増強の必要性の理解を進めて頂きたいと願っています。

本の入手には、IMOSのホームページでの申し込みか、電話やファックスでの申し込みを受け付けています。是非ご利用下さい。

電 話 03-3593-1117  
ファックス 03-3593-1118

IMOSホームページ <http://www.imos.co.jp>

プロフィール 高橋 迪（たかはし すずむ）

- ・ 中学生で海上保安官を志す。都立九段高校卒。
- ・ 昭和三十七年から海上保安大学校で寮生活四年半。卒業後海上保安官。
- ・ 秋田、門司港、呉で巡視船勤務。世界一周経験、救助、取締りなど六年間。
- ・ 沖縄、新潟、北九州、舞鶴、広島などの管区本部勤務六年間。
- ・ 鳥羽海上保安部長勤務では、一年間毎朝伊勢神宮に参拝。
- ・ 東京霞が関の本庁で、予算、法令、条約等の仕事を九年間。
- ・ 米国、インドネシア、英国での勤務六年間。
- ・ 海上保安学校校長、海上保安大学校長で、教育二年間、平成十二年退官。
- ・ 現在海事保安コンサルタント会社 IMOS代表取締役社長。





主な祭典・行事の御報告

七月

- ・一日 始之月次祭
- ・一日 夏越神楽祈禱
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・二日 中之月次祭
- ・十一日 後之月次祭
- ・二十一日 林間学園(詳細九頁)
- ・三十一日

八月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・二日 林間学園
- ・四日 中之月次祭
- ・十一日 後之月次祭
- ・二十一日

九月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・十一日 中之月次祭
- ・十七日 檀原神宮所蔵「御陵五十一基 絵図」特別展示
- ・十七日 天皇陵巡りの近世・近代 後之月次祭
- ・二十一日 秋季皇霊祭遙拝
- ・二十三日

十月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・三日 秋季大祭
- ・三日 秋季献華祭
- ・三日 秋季皇霊祭遙拝
- ・三十一日 境 将甫社中 献華展
- ・三十一日 中之月次祭
- ・三十一日 裏千家献茶祭(詳細九頁)



令和4年10月20日 抜穂祭



令和4年10月3日 献華展



毎月1回 月次祭にて『浦安の舞』を奉奏

十一月

- ・十七日 神嘗奉祝祭並神嘗祭遙拝
- ・二十日 抜穂祭
- ・二十日 第三十八回 檀原菊花展
- ・二十一日 後之月次祭
- ・二十五日 軍艦瑞鶴戦没者並びに物故者慰霊祭
- ・二十九日 献燈祭

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・三日 明治祭併石洲流献茶祭
- ・五日 写真展「檀原神宮日々の風景」開催
- ・十一日 中之月次祭
- ・二十一日 後之月次祭
- ・二十三日 新嘗祭
- ・二十三日 第五十回 檀原市農業祭
- ・二十三日 第三十八回 檀原菊花展
- ・三十日 大絵馬奉納奉告清祓

十二月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・二日 檀原神宮所蔵「御陵五十一基絵図」特別展示
- ・四日 天皇陵巡りの近世・近代 中之月次祭
- ・十一日 後之月次祭
- ・二十一日 神御衣御料奉納奉告祭
- ・二十三日 煤払神事
- ・二十八日 歳末大祓
- ・三十一日 除夜祭

※世界情勢を鑑み世界平和祈願のため、月三回齋行される月次祭の内一回『浦安の舞』を奉奏



令和4年12月31日 大祓



令和4年11月30日 大絵馬奉納奉告清祓



令和4年11月23日 第50回檀原市農業祭

企画展「天皇陵巡りの近世・近代」  
開催の経緯と見どころ

皇學館大学助教 長谷川 怜

筆者はこの数年来、橿原神宮の歴史的文書の調査や、宝物館の収藏品整理等を担当させて頂いている。いつも驚かされるのは、所蔵されている歴史的資料や美術品の数の多さ、そして内容・種類の豊かさである。明治二十三年の創建以来の文書や写真などを廃棄・散逸させずに保存するには強い意志が必要であり、橿原神宮におかれては歴史を引き継ぎ未来へ伝えていこうというゆるぎない姿勢を見ることができると。また、宝物館には明治から令和にかけての様々な奉納品が収蔵されているが、それはとりもなおさず創建以来一三〇年以上にわたり多くの崇敬者が存在し続けることの証である。

令和四年九月十七日から十二月四日にかけて、宝物館で開催した企画展「天皇陵巡りの近世・現代」は、平成二十六年に奉納された天皇陵の絵図を活用し、天皇陵についての情報が当時の人々にどのように伝えられていたのかを紹介する試みであった。

五十一枚の絵図は、平成二十六年に徳島県吉野川市の胡桃幸正さんが奉納したもので、かつて奈良県在住だった胡桃桃さんの祖母が

代々大切にしてきたという。茂木雅博先生（茨城大学名誉教授）による詳細な調査の結果、天皇陵の治定（位置を定めること）と修築の年代の検討から江戸時代後期に描かれたこと、また写本の作成者が現地を足で運んで絵図を作成したことが明らかにされた。調査報告書『橿原神宮所蔵山陵図』（由良大和古代文化研究協会、令和四年）の刊行に合わせ、絵図を中心にした展示の企画が持ち上がり、筆者が企画・構成を担当した。絵図の中から神武天皇陵を描いたものなど約十点を選定し、皇學館大学の遠藤慶太教授に解説を頂いた。

神武天皇陵の絵図を見ると、現在の陵とは異なるかたちであることに気付く。実は描かれた当時、現在の綏靖天皇陵が神武天皇陵とされていたのである（文久三年に幕府が行った陵墓調査と修復において現在地が神武天皇陵であると定められた）。こうした天皇陵の位置の変遷の歴史も絵図から知ることができ

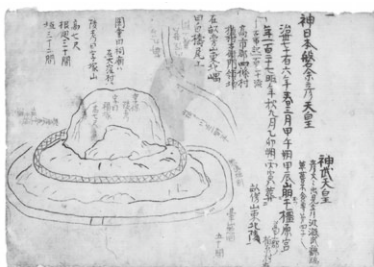
る。展示の中では、明治期以降、陵墓が政府により保護・整備されたこと、また交通インフラの整備に伴って陵墓巡りという新たなツーリズムが生まれたことも紹介し、天皇陵や橿原神宮に関する鳥瞰図や絵葉書などを用いて、観光地としての陵墓の姿にも焦点を当て

た。

期間中、新聞やテレビをはじめとする多くのメディアが展示を取り上げ、約千名の来場者を得た。今後も橿原神宮宝物館の貴重な収藏品が展示によって紹介され、橿原神宮への関心・興味が広がることを願ってやまない。※令和五年三月五日（日）まで宝物館では特別展「橿原神宮の奉納刀」を開催しています。是非ご覧ください。

プロフィール 長谷川 怜（はせがわ れい）

昭和六十一年、名古屋市長生まれ。日本近現代史専攻。学習院大学文学部史学科卒業、同大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程修了（博士・史学）。東京都公文書館専門員、千代田区立日比谷図書文化館文化財事務室学芸員を経て、平成三十一年より現職。令和二年より橿原神宮史料調査委員。



神武天皇陵の絵図  
現在の綏靖天皇陵にあたる



## 檀原だより

### 三年ぶりに林間学園を開催

令和四年七月三十一日〜八月四日の五日間、三年ぶりに林間学園を開催しました。

林間学園では小学生が各自の興味関心のある事柄や檀原神宮について学びます。林間学園は昭和二十四年に始まって以来、第七十回まで途切れることなく続いていましたが新型コロナウイルスの影響を受け令和二年より中止になっていました。しかし、子ども達に楽しい思い出を作ってあげたいとの考えのもと、感染症対策を取ることによって再開する運びとなりました。

林間学園の参加児童は歴史、科学、図工、音楽を選択して学習します。また選択学習とは別に総合学習を設け、檀原神宮についても学んでいきます。今回の総合学習では境内に生育している竹を用いた風鈴や打楽器、ウッドブロックの製作を行いました。この総合学習は檀原神宮の杜について知ってもらうために大阪芸術大学の協力により、企画されたものです。当神宮では令和元年より大阪芸術大学と共に境内の森林調査を行っています。調査によると竹林の拡大により他の樹木の成長が妨げられている状況が確認されています。そこで、現状を伝えると共に、杜の保全のために伐採した竹を再利用する機会を設けました。参加児童は竹を用いた作品の製作を通して、楽しみながら檀原神宮の杜について学んでいました。

令和五年も参加児童をはじめ関係者全員の安全確保に努め、子ども達が楽しい思い出を作れるよう林間学園を開催して参ります。



竹を用いた総合学習の様子

### 裏千家献茶祭を斎行

十月十二日（水）午前十時より、茶道裏千家坐忘齋家元・千宗室氏奉仕による献茶祭を斎行致しました。裏千家家元の奉仕による献茶祭は平成二年四月四日の御鎮座百年奉祝祭以来、三十二年ぶりとなります。このたびの献茶祭は当神宮の働きかけにより、約一年をかけて準備をしてきました。

当日は裏千家の関係者約百名が参列し、内拝殿にて祭典が斎行されました。祭典では齋主の祝詞奏上ののち、家元が点前座に着座。久方ぶりの裏千家奉仕による祭典であるため、家元は特別に献炭の儀を奉仕し、続いて濃茶と薄茶を点じられました。お茶は祭員により御神前に供えられ、その後齋主・宮司・家元と玉串拝礼を行い厳肅裡に祭典は終了しました。また、献茶祭に併せ貴賓館にて今日庵が担当された薄茶席が設けられ、祭典終了後には宮司以下職員数名が出席しました。

献茶祭に際し、宮司は「三十二年ぶりに裏千家家元にご奉仕をいただき感慨深い。今後も定期的に裏千家様のご奉仕のもと、献茶祭を執り行っていきたい」と述べました。今後、当神宮では裏千家奉仕の献茶祭を三年ごととに斎行して参ります。

このたびの献茶祭は未だに新型コロナウイルスが終息していないため、参列人数の縮小など制限を設けて斎行致しましたが、三年後の献茶祭では感染症が終息し、多くの参列を得て祭典が斎行出来まことを期待しております。



献茶祭にて奉仕される千宗室氏

第2回

春の出会い

# 神武 さん



神武天皇祭



浦安の舞



御鎮座記念祭

令和5年  
4月2日(日)  
3日(月)



国栖奏



奉納剣道大会



神職・巫女体験

春の一日は、皆様そろって  
「神武さん」詣りへ。

橿原神宮では四月二日、三日の  
春季大祭(御鎮座記念祭、神武天皇祭)に併せ、  
『春の出会い 神武さん』と題した  
奉祝行事を行います。

## 【おもな祭典・行事】

四月二日(日) ● 御鎮座記念祭 十時

四月三日(月) ● 神武天皇祭 十時

● 国栖奏 十三時  
(奈良県指定無形民俗文化財)

## 奉祝行事

- 奉納剣道大会
- お仕事体験イベント
- クイズラリー
- 昔ながらの縁日
- ふるまいよもぎ餅
- 三重県大紀町産魚市

詳細については、  
公式WEBサイトにて  
随時ご案内いたします。



※内容は変更となる場合があります。あらかじめご了承ください。※画像はイメージです。

ようこそ、日本のはじまりへ。  
橿原神宮

〒634-8550 奈良県橿原市久米町934  
TEL/0744-22-3271 FAX/0744-24-7720



橿原神宮

検索

発行日/令和5年2月  
編集・発行/橿原神宮庁  
印刷/岡村印刷工業株式会社